

Infor-view

医薬品情報学

卒後の医薬品情報教育を考える

薬剤師認定制度認証機構 内山 充

はじめに

この数年来、安心・安全な医療の担い手となって医療の質向上に貢献することを目指す薬剤師にとって、養成教育や実務活動に関しての法規や制度などは大きく変わり、環境条件は見違えるように整えられた。今や大切なのは、それらの条件の下で、薬剤師がそれぞれ適切な行動が取れるか否かである。すなわち、単に従来からの業務の改善や能率の向上、あるいは経験の蓄積に努力するにとどまらず、新しい技術や、時代に即した必要な知識を取り入れて、薬剤師業務に新たな価値を生み出し、経済効果も含めて、広く医療社会に影響を与えるような実務革新の担い手になることが大切であり、そのための人づくりが、引き続き重要な課題である。

人づくりのための情報教育

人づくりの基本は、教育・学習であり、一人ひとりの薬剤師が自らの中に新しい知識を創り出さなければならない。必要な知識の源は、一部の実務体験を除けば、大部分が多様な情報（学習情報や、医薬品情報、患者情報など）である。IT技術の革命的な進歩は、生涯研修の定着や情報公開の浸透ともあいまって、積極的に得ようとすれば居ながらにして豊富な情報を与えてくれる。薬剤師の実務革新のための知識豊かな人づくりには、情報教育が大きな役割と責任を負っているといえる。

知識の源としての情報は貴重であり、我々は情報の獲得に意欲的で無ければならない。しかし、得た情報をそのまま記録や記憶して伝達するのでは、単なる情報屋に過ぎない。知識人とは、得た情報を整理し意味づけをして、それを身につけた人を言う。さらに、知識人は、単に知っている、教えられる、だけではなく、知識に基づいた正しい動作や行為の「できる人」でなければならない。情報の価値は、獲得した内容や量ではなく、それが活用され生み出した成果によって決まるのである。「もの」としての情報それ自身の作成や伝達や収集のみに眼を奪われることなく、情報から実践的知識を生み出す「わざ」を習得できてこそ価値ある情報教育となる。

正しく評価して情報を実践的知識に

情報メディアにはいろいろあり、伝達法は多様であるが、発信者側と受信者側は常に流動的であって、一人ひとりが、時と場合に応じて発信者ともなり受信者ともなる。発信者として情報を提供する場合にも、また受信者として情報を活用する場合にも、保有している情報を正しく選別し、さらに、つながりを付け、目的に適合した知識にまで組み立てる評価能力が必要である。情報—知識—行為の効果的な結びつきは、「わざ」としての適正な評価能力があって初めて可能となる。

評価は単なる思考ではない。むしろ、根拠に基づいて結論を求める「科学」である。評価という仕事を決して安易に考えてはいけぬ。評価次第で、情報が活かされもするし無駄にもなる。医薬品情報の適切な評価は、具体的な医療効果のみならず経済的にも精神的にも計り知れない効果を発揮するが、誤った評価は、医療効果を無にするばかりでなく、かえって予期せぬ混乱や危害や損失をもたらす恐れが生じる。

わが国の社会では、評価と言う感覚が非常に遅れている。長い間信頼関係で支えられていて、評価の必要性が大きくなかったためかもしれない。最近、社会的責任に違反する事例が数多く発覚し、資格や能力に対する客観的な保証の意義が見直されるようになって、各方面でようやく第三者評価の必要性が唱えられはじめ、評価基準や評価機関が実際に設置されている。

評価の「わざ」と「ところ」

ところで、実際に公正で適切な評価を行うには、数値化された基準のみに頼るのではなく、評価を行う者が身につけなければならない幾つかの重要な点がある。すなわち、評価の「わざ」として最低限必要な能力は、

- ① ことの本質を常に見失わないこと—目的意識をはっきりと持ち、瑣末な方法論に目を奪われないこと。
- ② 適切な価値基準を持っていること—目的に照らして、何が重要で価値があるかを弁えること。
- ③ 正しい予測が出来ること—判断と行為の波及効果を見

通す先見性を備えること。

である。

さらに、「わざ」に加えて、評価の基盤となる「ところ」として、次のような心構えについての教育を忘れてはならない。すなわち、

①正しい評価は、評価対象の立場や考えを十分に理解しなければ行えない。情報には、必ず発信者の意図が含まれるので、それを見分けて判断する必要がある。

②情報の正しさはあらゆる可能な方法を用いて確認する必要があるが、誤りと断定するにも慎重である必要がある。

③評価者個人や所属集団の利害、あるいは好き嫌いに左右されてはならない。

④前例や慣習に捉われず、評価者の持論を固執せず、体面にこだわらないことにも留意すべきである。

⑤権威主義を捨て、パターンリズム（家父長的な温情主義）に陥らない心構えも持ちたいものである。

これらの点については、常に自ら省みて努力を続ける必要がある。

米軍の指摘から情報教育を学ぶ

わが国でこれまで、情報の活用あるいは積極的な情報教育に欠けていたことは、太平洋戦争の敗因の一つとしても知られている。当時の大本営参謀として米国側からも高く評価されている情報将校であった堀 栄三氏（「大本営参謀の情報戦記」（文春文庫））によれば、終戦後に米軍が日本軍の敗因として米政府に提出した報告書の中に、情報活動の欠陥が的確に指摘されているという。指摘された敗因は表1の左欄に示す5つの項目であるが、情報教育を考える上でも極めて貴重な指摘となっている。

これら指摘された欠陥を無くするための方策を、私なりに考えてみると、中欄に記載したとおり、これまで述べてきたような情報教育の中で習得すべき「わざ」が密接に関連していると考えられ、意を強くする。同時にその各々に関して、右欄に記したような、我々が日常ともすると陥りやすい欠陥が思い浮かぶが、これらの欠陥をできる限り改める心構えが必要であることも既に述べたとおりである。

おわりに

薬剤師による、医療の質向上に対する実質的な貢献と、社会からの信頼獲得の成否は、豊かで貴重な情報という「もの」をもとに、各個人が、評価という「わざ」と、さらに基盤としての「ところ」を持つことができるか否かにかかっている。

薬剤師は、本質を弁えた一貫した目的意識のもと、生涯を通じていろいろな意味での継続的学習により、しっかりした基礎知識と広い視野による正しい論理的根拠、並びに多様な価値観を養って欲しい。それらから導かれる正しい評価能力により、潤沢な情報を活用できる薬剤師を作ることが情報教育のあるべき姿と考える。

表1. 「敗因として指摘された情報不足」に学ぶ情報教育への取り組み

指摘された敗因(欠陥)	習得すべき必要な「わざ」	陥りやすい欠点
1. 国力判断の誤り	正確な自己診断・自己評価	思い上がり、自惚れ、誇め
2. 制空権の喪失 (偵察不能、情報不備)	積極的学習、情報収集 先見性(重要性の予知)	不作為、怠慢 沈黙・無関心
3. 組織の不統一	共通の目的意識、情報の共有	独占欲、相互牽制、嫉み
4. 作戦第一、情報軽視	根拠に基づく評価・予測	思い込み、独善的思考
5. 精神主義の誇張	合理的判断	前例固守、固定観念